



国際人材

国際機関で働く魅力

～農林水産分野で学位を目指す方々のキャリア形成のために～

Charms of international organizations for career development of academic researchers who seek doctor's degree in the field of agriculture, forestry and fisheries

山田 英也

Hideya YAMADA

(独) 国際協力機構 (JICA) 前上級審議役 (現: 農林水産省北海道農政事務所)

Former Vice President for Food, Agriculture and Nutrition, Japan International Cooperation Agency (JICA)

Present: Hokkaido Office, Ministry of Agriculture, Forestry and Fisheries

論文受付 2020 年 1 月 5 日 掲載決定 2020 年 1 月 18 日

要旨

本稿では、学位を取得しようとして（或いは、取得された）方々のキャリアパスの選択肢として国際機関を積極的に考えていただくことを目的として、国際機関事務局の業務の実態について紹介する。国際機関事務局の職員となれば、世界の人々が安全で幸せな生活を送れるよう、政策立案、情報提供、現場活動等の幅広い分野において、専門分野の知識を現場で活用する、プロフェッショナルでダイナミックな仕事師集団の一員となる。その活動においては博士号を有していることが有利であり、国際機関の勤務経験は人脈構築に繋がり、個人のキャリア形成上も貴重な財産となる。途上国の開発を行う国際機関においては、様々な農林水産分野のポストがあり、専門分野に合ったポストも比較的見つけやすい。

キーワード：国際機関、キャリアパス、博士号、専門性、考えの軸

Abstract. This article is to explain the work of secretariat of international organizations with a view to recommend researchers who are about to or have earned doctor's degree to choose international organizations positively as their career path. Once he/she joins the secretariat of an international organization, he/she can work as a member of the dynamic and capable professional group who apply their expertise in wide range of areas such as planning policy, providing information, and operating in the field for better livelihood of people in the world. Holding a doctor's degree works to his/her advantage for working at an international organization, and the experience of working for an international organization creates valuable asset for developing his/her career. Various posts are available in the field of agriculture, forestry and fisheries at development organizations, and it is relatively easy to find posts suitable for his/her professional areas.

Key words: International organization, Career path, Doctor's degree, Specialization, Axis of thought

1. はじめに

私は過去に計6年間、ローマの在イタリア日本国大使館に籍を置き、日本政府の代表として、ローマに本部を置く食料・農業関係の国際機関^(注1)の活動に関する

様々な多国間の議論に参加しました。その後、(独)国際協力機構(JICA)の職員として、二国間の農業分野の国際協力に携わる中で、国際機関との連携強化の取組に携わりました。これらの機会において、私は日本政府機関の職員として国際機関を外から見る立場で、国

際機関で働いた経験はありません。しかし、これまでの経験から、学位を取得しようとされている（或いは取得された）方々のキャリアパスの選択肢として、国際機関の事務局をもっと積極的に考えても良いのではないかと思うようになりました。そこで、本誌をお借りして「国際機関で働くとは、どういうことか」について私見を紹介させていただくことといたしました。

なお本稿では、国際機関で働くことを考える場合に、読者の方々がご関心を持ちそうな具体的なポイントを中心に紹介し、国際機関そのものの説明は簡潔に留めました。また、国際機関のポストに関する実務的な情報、例えば空席情報、応募方法や国際機関に勤務する方々の体験談等は、外務省国際機関人事センターのウェブサイト^(注2)等に豊富な情報が掲載されていますので、是非そちらもご参照下さい。

2. 国際機関とは何か

—ローマに本部を置く食料・農業関係の国際機関を例として—

国際機関は、大きく分けて、国連機関と国連傘下にはない政府間機関がありますが^(注3)、いずれも、有志のメンバー（多くの場合、政府機関）が集まり、協調して世界の人々の暮らしを安全で快適にするために活動しています。活動内容を決め、行動するのはメンバーであり、事務局はその活動を支えるために設置されています。事務局の職員は様々な国籍の人が集まっており、母国の利益という立場を離れ、国際人として「世界益」のために働く、尊い仕事です。本節では、私が担当した、ローマに本部を置く食料・農業関係の国際機関を例として、国際機関及びその事務局員の業務の大まかなイメージをご紹介します。

(1) ローマに本部を置く食料・農業関係の国際機関の概要

私が担当した、イタリアのローマに本部を置く食料・農業関係の国際機関は、世界の飢餓と貧困をなくすために活動する点は共通ですが、生い立ち、活動内容やアプローチは多様であり、ごく大まかには以下のとおりです。なお、これらの機関は、本部はローマにありますが、アジア・アフリカといった地域の拠点となる国に、当該地域を統括する地域局を置いたり、更には国毎に事務所を置くことによって、現場のニーズに根差した活動を迅速に行える体制をとっています。従って、職員の勤務地も様々です。

① FAO：1945年、国連の専門機関として発足。現

場での農業技術の提供、世界の農業開発政策や国際規範の策定、統計等の情報提供を行う。

② WFP：1961年、国連とFAOの決議により発足。食料等を用いた現場での緊急・人道支援や開発支援を行う。

③ IFAD：1974年、国連の専門機関として発足。開発途上国の農業農村開発のための資金の貸付けや贈与を行う。

④ Bioversity International：1974年、国際農業研究協議グループ（CGIAR）に属する研究機関の一つとして発足。植物遺伝資源の多様性確保のための研究を行う（国連機関ではない）。

(2) 国際機関事務局員の仕事の大まかなイメージ

ここで、上記の機関を例に、国際機関事務局員としての仕事の大まかなイメージをご紹介します。

① FAO、WFP、IFAD

FAO、WFP、IFADは国連傘下の機関で、貧困削減のため、国際的な行動の枠組を作ったり、農産物の生産や病害虫の情報や統計データを発信したり、途上国の政府や農民と一緒に現場で開発活動を行ったり等々、幅広い活動を行っています。これらは行政官の仕事と思われるかもしれませんが、それぞれの分野毎に専門家がっており、その多くは関連分野の博士学位を有する人達です。日本では、つぶしの利く人は「ジェネラリスト」と言われ、それ自体がキャリアですが、国際機関では、いずれかの分野の「スペシャリスト」であることが求められ（プロフェッショナル・スタッフと呼ばれます）、専門分野を持たない人は庶務などの支援スタッフ（ジェネラル・スタッフと呼ばれます）として働くこととなります。これに鑑みれば、国際機関は、専門分野の学位を有している方々が、それを活かして仕事ができる職場と言えるのではないかと思います。

② Bioversity International

Bioversity Internationalは、研究者の組織です。CGIARに属すると申し上げましたが、CGIARは、これまで緩やかなグループとして機能しており、小麦、米、魚、熱帯農業など分野毎の15の研究機関が参加していますが、各研究機関の活動は基本的に独立しています。それぞれが途上国の現場に密着した研究を行い、農業技術改良や小農の貧困削減等様々な知見を提供しており、基礎研究よりも現場で適用できる実践的な技術や政策の研究を重視しているのが特徴といえるでしょう。Bioversityは、植物遺伝資源の多様性確保を通じた途上国の農民の生計向上を目的としていますが、近年は

フードシステムの持続性といった観点に広げて活動を展開しています。CGIARの機関は、研究者としては身近に感じられる機関ではないかと思います。

3. 国際機関で働くということ

本節は本稿の中心です。前節でご紹介した国際機関に限らず、一般的に国際機関の事務局員としての仕事を、読者が関心を持つと思われる具体的なポイントを中心に紹介します。

(1) 国際機関の事務局とは？その職員となる魅力は？

国際機関の活動は、メンバーが総会や理事会といった意思決定機関で決定した内容に基づいて、メンバーなどから拠出された資金を使って行われます。その内容は、例えば、「世界各国の農業生産高についての統計を整備しよう」、「A国が干ばつで農業生産が壊滅したので、至急食料を届けよう」、「世界の水産資源の持続的利用のため、ガイドラインを作ろう」、「地球温暖化に与える影響を少なくする農法を普及しよう」等々、実に様々です。事務局はこうした様々な業務の実行部隊であり、その専門的な知見、技能や経験を動員し、メンバーが決定した事項の細部を詰め、実行できる形に仕上げていきます。

こうした業務は、メンバーのイニシアチブを実行する受け身のものもありますが、能動的な業務、すなわち、専門分野の知識を活かして世界の動向や課題を捉え、国際社会が行動すべき事項をメンバーに提案し、承認を得て実行する、といった業務の方が、むしろ主体です。

つまり、国際機関の事務局は、その機関が担当する分野についてのプロフェッショナル集団であり、かつ、その専門知識や理論を、机上ではなく現場で実際に適用する、ダイナミックな仕事師集団なのです。

勿論、幅広い業務を事務局員だけでこなすことは不可能なので、外部のコンサルタント、大学の先生、メンバー国政府機関の専門家、民間企業、NGOなど、様々な関係者と協力して取り組んでいます。すなわち、多くのステークホルダーとのネットワークを有する、開放性に富んだ柔軟な組織であるとも言えます。

国際機関の職員となるということは、このように、幅広い関係者とのネットワークの中で、専門知識を現場で活かす、ダイナミックな業務を行う仲間の一員となる、ということなのです。自分の専門分野以外の専門家とも多く交流することになり、現場を訪問する機会も多くありますので、その知的刺激は大きいと思います。

(2) 具体的な業務の内容は？キャリア形成に役に立つ？

業務内容は実に様々ですが、大きく二分すると、①途上国の現場で一般の人々や現地の政府職員に直接触れ合いながら支援活動をする、②機関の本部オフィスで基本政策を立案する、に分けられます。いずれにも共通しているのは「人々の役に立つ」ということで、例えば、生分解性新素材を開発するとか、新たな所得分配理論を考案するとかいった基礎的な研究面での貢献よりも、実際に現場に適用できるアイデアを考えることの方に重点があると思います。勿論、CGIARグループの機関のように研究を主とする機関もありますが、いずれにせよ、現場において効果的であるか、コストや時間の面で効率的であるか、といった現実的な物差しの下で仕事をする点が特徴です。

また、人材の流動性は比較的高く、専門性の高い職種（エコノミスト、法律家、獣医官など）においては、国際機関と大学、あるいはNGOや民間企業も含めて、転職しながら仕事をする例もしばしば見られます。また、キャリアアップや専門分野を広げるために、一旦国際機関を離れて大学で学んだ後に、改めて国際機関のポストを得て戻ってくる例も見られます。さらに言えば、数年毎の異動を必須とする機関も増えてきているようです。年功序列で昇進するシステムではなく、キャリアアップのためには自ら希望して異動していく必要があるため、このような流動性が生じる面もあるのでしょうか。いずれにせよ、人事の流動性が高いため、仮に一生を賭ける覚悟がなくとも、キャリアの中に国際機関を組み込むことは柔軟にできると思います。また、多くの人が異動していく中で様々な人たちとの交流ができますので、その中で得られる人脈は、個人としても貴重な財産になると思います。

(3) 国際感覚が必須？

「国際感覚」といっても曖昧なもので、それよりも、「自分の考え方の軸が必要」と申し上げたいと思います。国際機関の職員である以上、国際社会のために働くのが使命ですが、完全に無色透明で仕事をするのではなく、「自分はどうか考えるか」という軸を持っていることが必要だと思います。勿論、特定の国への利益誘導をすることは許されず、中立であることが求められます。しかし、メンバーがコンセンサスに達するにはどのような方向性を打ち出すのが適切か、様々な情報を基に判断するバランス感覚が求められますので、そのためにも、基準となる考え方の軸が必要だと思います。多くの場合、日本は主要な資金拠出国であることもあって、

日本がどう考えるか？日本に支持してもらえるか？といったことは、事務局内でも関心事となり、日本人職員として意見を求められることも多いようです。つまり、個人的にも、あるいは周囲からも、日本人であることを意識させられながら、グローバルな問題で国際社会が協調して行動するためにはどうすればよいか考える、ということになります。

また、気候変動や自然災害への対応のような、国境で区切ることのできない業務も増えてきています。このような課題については、メンバーが様々な意見をぶつけ合う中で、一緒に行動できる方向性を模索していくことになり、事務局もそうした多様な意見に柔軟に対応できることが必要です。そういう発想の柔軟性も必要でしょう。

(4) 博士号は役に立つ？

博士号は役に立ちます。長い目で見れば、国際機関でプロフェッショナル・スタッフとして十全に活動するための資格の一つとさえ言える、と申し上げておきましょう。ポスト募集の際には、当該分野のプロであることが求められ、それを証明するために、学歴、職歴、語学力、健康などの要件が課されます。学歴については、多くのポストで修士以上が要件になります。では苦労して博士まで修得する必要はないかという、やはり博士であることが望ましく、修士はあくまで最低ラインで、上位のポストになるほど、実態として博士を有している人が多くなり、仕事で付き合う相手も博士が多くなります。こうした場合、博士号を有していることに対して周囲から敬意が払われ、自分の発する意見にも箔がついてきます。

勿論、修士でも活躍している人は大勢います。しかし、博士は当該分野のプロであることを客観的に示す武器であり、仕事で付き合う相手に気後れせず、自分の意見にきちんと耳を傾けてもらうためにも、博士を有していることはアドバンテージになる、というのが私の実感です。

給与面では、修士が要件とされているポストについて、博士号を有していても、給料が上乘せされることはありません。しかし、多くのポストで当該分野の実務経験を求められ、上位ポストになるほど当該分野で長く実務経験を積んでいることが求められるのですが、博士を有していれば実務経験年数が短くてもOKという場合もありますので、若くして上位ポスト（＝高給）に就けるチャンスが開ける、という面もあると思います。これらを考えると、採用後も含めた長い目で見れば、

博士号は、プロフェッショナル・スタッフとして国際機関で遺憾なく能力を発揮し活躍するために、アドバンテージであることを超えて必要条件である、と言っても過言ではないと思います。

なお、日本国内ですと、どの大学で学位を得たか、どの先生に指導を受けたか、が後々付いて回る印象がありますが、国際機関では、大学名や指導教官は日本ほどの影響力はない印象です。世界には無数の大学があるのですから、大学のランクなどで一律に比較できないのは、当然と言えば当然ですし、様々な国の出身者が集まっていますので、出身校もまちまちで、学閥のようなグループができるほど同一大学の出身者が集まることはない、という面もあるのでしょうか。強いて言えば、欧米の有名大学の出身者が多い印象ですが、先述のように、自分の軸をもって思考することができることが重要で、それは日本の大学院でも十分訓練できると思います。自分の能力を示すのは学位であって出身校ではない、と考えれば良いでしょう。

(5) 農林水産分野のポストは少ないのでは？

むしろ多いと思います。世界をより良くするために働くということは、開発途上国の人達のために働くことが多くなり、そうした途上国は主要な産業が農林水産業であることが多いため、必然的に農林水産関係のポストは数多くあり、自分の専門に合ったポストを見つけやすい、と言えるでしょう。また、最近では国際機関の業務が多様化してきており、例えばIAEA（国際原子力機関）が放射線を使って貧困層の栄養状態の測定を行う等、意外な機関で食料・農業の知識が役立つことがありますので、広い選択肢を持ってポストを探ることが可能です。なお強いて言えば、例えば育種が専門であったとして、A国の国民の嗜好に合う品種に改良できるか、収穫後のロスをどのように最小化するか、といった、フードシステム全体の中で自分の専門を考えられるような、広い視野が必要と思われる。

(6) 空席ポストに応募しても倍率が高く、競争が激しいのでは？

空席ポスト1つに1,000通を超える応募書類が届くこともあるそうですから、見かけ上の競争が激しいのは否定できないでしょう。ただし、1人で沢山のポストに応募していることが通例ですし、要件に見合った能力のある人は実はそれほど多くないので、実質的な倍率はずっと低く、最初の段階の書類審査で大幅に絞り込み、次の段階の面接対象者はごく少数数になるのが普

通です。これがいわゆるショートリストで、ここに乗ってからの本当の選考過程です。上位ポストになると出身国の政府から国際機関に採用の働きかけがなされることもあり、事務局としてもメンバー国との関係に鑑み、政治的な配慮がなされることもあるようです。日本政府も、国際機関の日本人職員を積極的に増やそうという方針ですので、応募の際には外務省（国際機関人事センター）に相談されるとよいでしょう。なお、35歳以下の方を対象に、日本政府が人件費を負担して国際機関に派遣する制度（JPO(Junior Professional Officer)派遣制度）もあります。

なお私は、日本人にはアドバンテージがあると思っています。国際機関事務局の職員の属性は多様であることが良しとされますが、ともすれば大ドナーである欧米、そして国の数として多数を占めるアフリカ等の途上国への配慮がなされがちな環境の中で、「アジアの先進国」である日本人はユニークな存在で、多様性をもたらす格好の人材です。それにも拘わらず日本人職員はまだまだ少ないので、いい日本人がいたら採用したい、という声はあちこちで聞きます。さらに、女性に活躍の場を広げようというのが世界的な流れですので、日本人女性は更に有利です。当然ながら、日本人というだけで下駄を履かせてもらえるわけではありませんが、少なくとも高倍率に驚いて委縮される必要はありません。

(7) 採用されても身分が不安定なのは？

一旦採用されれば終身雇用、というのではなく、ポストには1～2年間の任期が定められているのが通例です。また、各国政府から国際機関に拠出される予算の伸び悩みを反映し、ポストが廃止されたり、ポストは維持されても、他の廃止されたポストの仕事が追加されたりすることもあります。

これを聞くと、ブラックな感じがして、日本の組織の方が安定していると思われるかもしれませんが、特に国連機関の場合、職員組合の力も強く、通常に仕事をしていれば契約は更新され、容易には解雇されません。ただし、昇進するためには新たなポストを得る必要がありますので、職員の方々は、日頃から人脈を培って、空席になりそうなポストの情報を得たり、自分の業務の業績を上司や周囲にアピールしたりと、様々な知恵を働かせているようです。

私の印象では、一般に日本人は、仕事の期限を守る、仕事内容に一定のクオリティが期待できる、上司をリスペクトし、ハウレンソウ（報告・連絡・相談）をきちんと行う、といったように、信頼の目で見られること

が多いようです。日本で社会人として通用するなら、国際機関ではそれよりも高く評価されるのではないのでしょうか。

(8) 給与が安いのでは？

給与の多寡は考え方によるでしょう。国連機関の場合、給与や活動費は国連の規程に基づき支払われますので、例えば、あるドナーから大口資金の獲得に成功したからといって給与がアップすることはありませんが、逆に言えば、固定給ですので、機関の財政状況が苦しくとも給与がカットされることはありません。国連機関の場合、給与に任国の税金が課税されず、額面がそのまま手取りになるというメリットもあります。

私の印象では、給与もさることながら、国際条約に基づく身体への不可侵といった特権や、購入品の免税など、身分保障や福利厚生が手厚いと感じます。さらに申し上げると、家族を大事にする共通理解があり、例えば、学校の放課後、スクールバスで子供を職場に連れて来てくれて、子供と一緒に帰宅する、といった光景を目にしたこともあります。

(9) 日本人は語学のハンディがあり、不利では？

ほぼ全ての国際機関で日本語は公用語ではありませんので、日本語を母語とする我々にとっては、公用語を母語とする人々と比べてハンディキャップがあることは否めません。ただし、仏語圏・西語圏の国は別として、ルール上は国連機関では国連公用語を2か国語以上でできることが要件とはいえ、実態として殆どの業務が英語で行われているようです。ですから日本人の場合、採用時点では英語さえ出来れば、他の公用語のレベルは、採用後勉強することとしてある程度大目にもてもらえる場合もあるようです。実際、働いている職員の英語力も個人毎に見ると様々で、ネイティブであっても米国、英国、インド等々様々なバージョンがありますし、英語を母語としない人たちはお国訛りの混じった様々なアクセントの英語を話しており、そのレベルや流暢さも様々です。ですから、ジャパニングリッシュであっても、全く気後れすることはないと思います。また、専門分野の業務ですから、使われる語彙もある程度範囲が限られていますので、慣れればそれほど苦にならないと思います。

さらに申し上げれば、事務局内及び公式の会議では公用語が用いられますが、業務の現場では実務上様々な言語が用いられています。例えば、大ドナーである日本政府とのやり取りには、日本語と日本式の仕事の

やり方に通じていることが必須で、日本人職員には有利です。これを反映し、国際機関の日本事務所の職員の多くは日本人です。

なお、これまでに申し上げたことを踏まえれば、語学力は業務の基礎として重要ですが、業務能力はそれだけで決まるものではなく、自分の考え方の軸を持ちつつ、皆が納得できる方向にまとめて物事を実行に移す行動力こそが重要、ということも、繰り返しておきたいと思います。

(10) オフタイムの過ごし方は？

これは人それぞれです。ステレオタイプとして、イタリア人は遊び好き、日本人は働き中毒、などと思われていますが、イタリア人でも、週末もオフィスに出勤して黙々と仕事をしている人もおり、一概に言えません。会議でメンバーの意見が対立して紛糾すれば、サンドイッチを頬張りながら真夜中まで働き続けることもあります。

間違いなく言えるのは、オンとオフがはっきりしており、区切りがつけば休暇をしっかりとることでしょう。任国によっては、セキュリティ上、休日でも安全の確保されたコンパウンドの中になければならない場合もありますが、決められた期間を働いた後は一旦任地を離れて休暇をとり、鋭気を養ってきます。定期的な帰国休暇もあります。気分転換が上手な人が多い印象です。

(11) 国際機関に興味を持った。では、どのような準備をすれば良い？

最低条件として英語は必須ですが、それ以外に特別なことは必要なく、自分の専門分野を深め、自分の人間性を磨き、それを応募書類や面接で表現することに尽きると思います。

国際機関には実に多様な人が働いており、どのような人にも活躍の場があると感じます。そういう多様性を受け入れ、楽しむ、といった懐の広さ、気持ちの余裕があるとよいでしょう。

応募の仕方の実務等は、冒頭の外務省HPなどをご覧いただければと思いますが、実際に国際機関への就職を目指すとして、空席情報を見て、書類を送って待つ

ていても、何も連絡が来ないかもしれません。運良く連絡があっても、選考作業が何か月もかかってなかなか進まない、という場合もあるでしょう。書類を送って待つだけでなく、国際機関の本部や日本事務所を訪ねてみる、まずはインターンや臨時のコンサルタントで働きながら人脈を作る、など、国際機関の観察を兼ねて、長期戦のつもりで様々なアプローチをしてみると、道が開けてくることもあると思います。

4. おわりに

以上、国際機関で働くとはどういうことか、につき、私見を述べさせていただきました。個人的な意見ですので、偏りもあるかもしれません。しかし、皆様が蓄積された学識を現場で活かし、国際社会に役に立つ、世界の人々の幸せに貢献する、ということは、とても尊く、やり甲斐がある仕事だと思います。読者の方々のキャリアパスの中で、是非その可能性を探ってみられることをお勧めします。

なお、本稿は主に若い世代の方々を念頭に置いた記述になっていますが、国際機関の幹部ポストの場合、50歳を過ぎて初めて国際機関に入って来られるケースもあり、ポストにもよりますが、就職に当たって年齢制限は無いと言ってよいと思います。ジュニアレベルのポストであれば、若い方々をOJT的に育成していく観点もありますが、シニアレベルになるほど、当該ポストに必要とされる即戦力を有しているか、という観点で判断されますので、能力さえあれば年齢は無関係、と言えると思います。

読者の皆様が、国際社会で専門を活かして大いに活躍されることをお祈りいたします。

【注】

(注1) FAO (国連食糧農業機関)、WFP (国連世界食糧計画)、IFAD (国際農業開発基金)、Bioversity International (国際生物多様性センター)

(注2) <https://www.mofa-irc.go.jp/>

(注3) これら公的機関以外にも、非政府組織や民間財団がありますが、本稿の対象外とします。